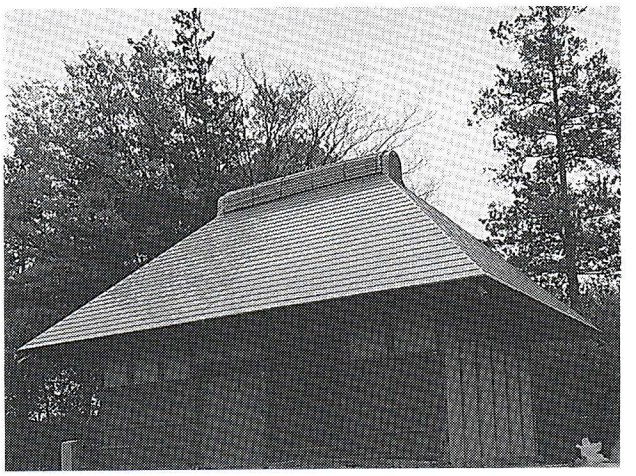
ねりまの文化財

練馬区教育委員会
社会教育課
（文化財係）
☎3993-1111 内線 2766
〒176 練馬区豊玉北6-12-1

江戸期の納屋を移築復元

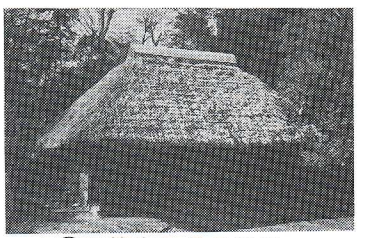
―土支田農業公園―



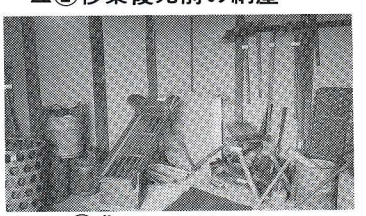
この度、江戸末期の納屋が土支田農業公園内に移築復元されました。元は大泉一丁目の見留家（現榊原家）に伝存していた茅葺屋根の建物でした。寄棟造で基礎は玉石の上に土台を巡らせ、外壁は土壁（木舞）一部板張りの建物です。建築様式から江戸末期に建てられたと考えられ、都内でも貴重な建物です。

納屋内には、江戸末～昭和の初め頃まで使われていた農具、民具が展示してあり、今では見ることの出来なくなったかつての農業の姿を偲ぶことが出来ます。

〈土支田農業公園〉
△所在地　練馬区土支田３―34―26
△電話　（５３８７）８９３１
△納屋開放時間　９時30分～16時30分
△休園日　毎週火曜日・年末年始



▲②移築復元前の納屋



▲③農具・民具の展示

文化財資料
新刊頒布中

新しく刊行した文化財に関する左記資料を6月1日より頒布しています。頒布窓口は、教育委員会社会教育課・郷土資料室・情報公開室です。また、各図書館でもご覧になれます。

◎練馬を往く　改訂版（430円）
◎練馬の石造物　寺院編その一（1300円）
◎小島家文書（6800円）
◎比丘尼橋遺跡Ｂ地点調査報告書（1900円）

清戸道

文化財保護推進員　亀井　邦彦

〈経路と主な路傍の石造物〉

練馬区のほぼ中央を北西から南東に貫通していた「清戸道」は、江戸と練馬の村々を結ぶ交通路として重要な役割を果していた。今日、一部新目白通りに併合され、千川通りと重なる部分では千川上水が暗渠となるなど、景観は大きく変化しているけれども、その昔の経路は何らかの形で今に残されている。あらましを図に記してみた。（下図参照）

東から西に向かうとすれば、その起点は文京区内の神田川に架かる江戸川橋の北詰めとなる。ここから西に長い上り坂があり、これが有名な目白坂。肥桶を積んだ荷車を押し上げるなどを商売とした「立ちんぼう」という人たちがいたところとか。

豊島区から練馬区にさしかかるあたりで、昭和三十年代に暗渠となった千川上水に沿っていたことから、この先を千川通りと称している。豊玉北六丁目交差点で千川通りと別れ、以後円光院の西方まで、だいたい新目白通りに併合されている。その先で北に別れ谷原交差点に出る。ここから西は大泉小学校までほぼ一直線に延び、通称「大泉街道」とも呼ばれている。

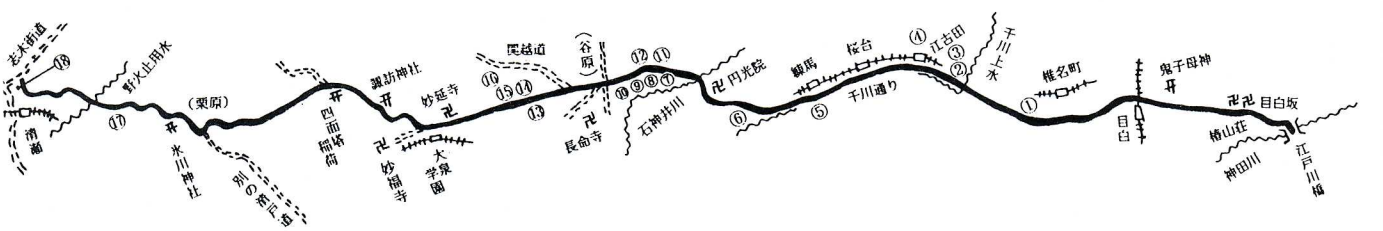
四面塔稲荷先で道は二又に別れ、以前この角に「四面塔」の地名の発祥ともいわれる題目塔が建っていた。この北に別れる道もまた清戸道の一本とも見られている。

終点の清瀬市元町一―九の志木街道と交じわる角には、庚申塔や馬頭観音など多くの石塔が並んでいる。

以下、沿道の主な石造物を列記してみる。（　）内は刻年次を西暦で記した。

①子育地蔵（一七一〇）、南長崎二―三、②千川子育稲荷、元は千川上水土堤に祀られていたが、現在は練馬区旭丘一―三七、③千川地蔵、元千川上水から拾い上げられたという。現在は能満寺内、④千川堤植桜楓碑（一九一五）、元は江古田駅南側、通称二又にあった。現在は江古田浅間神社内、⑤橋供養正観世音（一七七四）、元豊玉北五―一筋違橋脇にあった。現在は東神社内、⑥向山・庚申塔（一七〇九）、向山一―二―一〇、⑦宮田橋・庚申塔（一七一五）、高松二―三、⑧宮田橋敷石供養塔（一八〇七）、同右、⑨高松墓地・庚申塔（一七三三）、高松三―九、⑩同・地蔵（一八〇二）、同右、⑪高松・庚申塔（一六九八）高松三―一二、⑫高松・延命地蔵（一七六七）、高松三―一三、⑬下石神井馬頭観世音（一八八四）、石神井町四―一九―一三、⑭庚申灯籠（一八〇三）、三原台一―二八、⑮六十六部供養塔（一七六〇）同右、⑯北田中・庚申塔（一七六一）、同右、⑰馬頭十一面観世音

▶⑪高松三―一二　庚申塔



（一八二六）、東久留米市金山町一―一四、⑱庚申塔（一七二五）、馬頭観世音（一七八二）他多数、清瀬市元町一―九

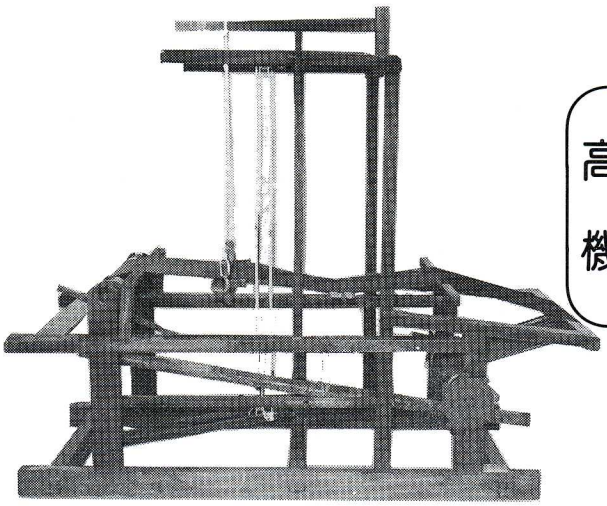
〈清戸道あれこれ〉

その名が示すように、この道は清瀬市内の志木街道に沿う清戸地域（上・中・下とある）を目ざしたものであった。江戸時代、この地方に尾張徳川家の鷹場（狩場）御殿ができ（延宝四年―一六七六）、その時江戸との往来に利用されたとの説があり、『高田町史』という本には延宝年中の検地の際に設けられた、と記している。

ともかく、その後は村の産物を江戸に輸送する産業の道として大きな役割を果している。練馬の村々からは有名な練馬大根のタクアン漬けはもちろん、近代には蔬菜類を荷車や牛車、馬車などで東京の市場に運んでいる。加えて円光院や長命寺、さらに妙福寺などへの信仰の道としても利用され、江戸時代の文人の紀行文にも登場する。

この道を明確に「清戸道」と記した最初の文献は明治九年の『東京府管内統計表』では

郷土資料室収蔵品シリーズ　第16回

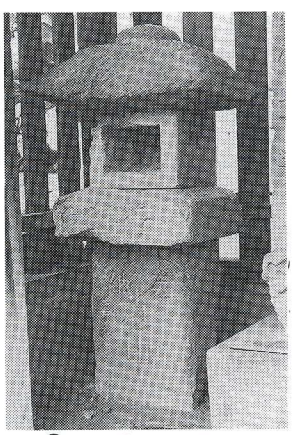


高機（たかはた）

練馬では、大正の頃まで、木綿の糸や自家産の絹糸で、着物や帯などを織っている家が多かったといわれている。「古老聞書」にも、「大正十年頃までチャンパタ、チャンパタと音をたてながら機を織っていた」と書かれている。

高機は地機（じばた）に対して、高く腰掛けるのでつけられた名前である。地機より改良されており、踏み木を交互に踏むと、たて糸が上下に開いて、よこ糸を入れる道をつくる。

高機を組み立ててある材料は、建築用の敷居、ぬき、たるき等と同じ寸法のものが使用されている。材料が得やすく、素人でも、簡単な修理ができるようにしたためであろう。庶民の知恵である。



▲⑭三原台１―28 灯籠

ないか、と思われる。表中に「清戸道」の欄があり、下に「上土支田村（現・東大泉）」と記している。その以前には「川越道中」あるいは「目白台通り」「目白坂通」「鼠山通り」などと記したものがある。もっとも今でも清瀬の方では「川越道」と呼ぶ人があったり、「所沢道」あるいは「高田道」さらに「高田―松井線（戦前の通称）」と呼ぶ人もある。松井は今の所沢市上・下安松の地だ。

一方江戸時代に「清戸道」と呼ばれた道は別にあり、その一本は新座市栗原から保谷市内を南東に抜けて練馬区関町北に至り、本立寺の前を通って武蔵関駅東側の踏み切りから青梅街道に達する道で、保谷市の古老は今でもこれを「清戸道」と言っている。

また、実際、保谷市から西側、東久留米、清瀬の人たちはこの道を多く利用し、青梅街道経由で東京の市場へ野菜を運んでいる。練馬区内でも、関町地域の人はこれに準じていたのである。

チャガ馬とちがや馬

文化財保護推進員　伊藤　経一

毎年八月七日、練馬区内の農家では月送りの七夕まつりに、イネ科多年生草本の茅（チガヤ）で、高さ四〇センチ、全長五〇センチぐらいの、頸を真っ直ぐに上に立てた雄と、頸を水平にした雌の馬を作る。色たんざくをつけた笹竹二本の間に、これもチガヤで作った綱を渡し、そこに馬を向かい合わせにしてつるす。その下に目籠を伏せ、それに果物などを乗せた供え物を飾るのである。

もともと七夕は、五穀豊穣をお祈りするまつりであろうから、このちがやの馬は、田の神の乗馬としてさし上げ、田を見廻っていただこうというのである。このちがや馬が田の神の乗り物なら、雄雌に分ける必要はない筈だが、むかしから農作物の増産にむすびつけて家内安全と子孫繁栄も一緒にお祈りしようというのが習慣だったのである。いまは、単に七夕行事の一環として続けられているが、肝心のこの馬を作れる人も少なくなってしまった。

土地の古い人たちは、この馬を「チャガ馬」と呼んでいることが気にかかる。「ちがや馬」よりなめらかにいえるので、転化したということだが、茅（チガヤ）で作った馬なのであるから、これはあくまで、「ちがや馬」と呼ぶべきではないだろうか。

なお、現在まで「ちがや馬飾り」の無形民俗文化財保持者として、練馬区に登録された人は、次の方々である。

◎内田安太郎氏（北町一―四五―八）
◎内田　和助氏（北町一―二二―九）
◎加藤　義雄氏（東大泉五―四〇―二二）
◎山口　勝男氏（北町一―二四―八）

お盆について

文化財保護推進員　鈴木　曹元

法事やお彼岸など先祖まつりでは、お寺やお墓という聖域に入って、手を合わせ、心をととのえると、あちらの世界のご先祖さまと対面できます。しかし、お盆の三日間はあちらの世界からこちらの家に出て来てもらい、私たちは、「おかえりなさい」とお迎えします。家に帰ってきたご先祖さまのために、それぞれの家では特に精霊棚を作ります（ビデオねりまNo.53参照）。お座敷のかわりに真菰（まこも）を敷いて、お位牌も仏壇から出て来てもらい、季節の品を供えます。

しかし、ご先祖さまだけをもてなすのではありません。今、私たちがここにあるのは、先祖―子孫という「タテ」のつながりだけでなく、多くの生きものの犠牲という「ヨコ」のつながりのおかげでもあるのです。お盆ではその「ヨコのおかげさま」を代表して、餓鬼にもほどこしをします。だから精霊棚の灯明は、餓鬼にまぶしくない「鬼灯（ほおずき）」を使うんです。ほおずき・いなほ・なす・きゅうりをつるす縄は「チガヤ」を縄になって使います。

お盆の一日目の迎え火は墓地の入口で「オガラ」（アサの皮をはいだあとの茎）を燃やします。ご先祖さま〈精霊〉だけでなく、先立った子供たちも父母のいる家に帰省します。ご先祖さまと縁ある者が和気あいあい。町中がにぎやかになって、盆おどりなどして、三日間「おもてなし」します。三日間のおもてなしがすむと、なごり惜しいけれど、ご先祖さまは再びあちらの世界に還っていきます。

「また、来年も遊びに来るまで元気でね。」とご先祖さまを墓地の入口まで送りに行き、送り火を燃やすのです。私の家では昭和25年までは、墓地の入口で火を燃やしました。その後、墓の移転により、家の出入口門前で迎え火、送り火をするようになりました。

昔から「盆と正月」といわれるように、私たちはお盆を新年と同じく、大きなけじめとしてきました。